



初秋の行楽地である遼寧省の本溪と千山に一泊二日の旅にでた。

同学の得永さんが旅行社主宰のバスツアーの計画をたててくれたが、旅行直前に体調を崩し不参加となった。中国人の中に日本人は私独りだけとなる恐れがあったが、幸いにも同学の岩田さんが代わりに参加してくれることになった。

9月20日(火)早朝、6時半出発で本溪まで5時間のバス旅行であった。15,6人乗りのミニバスで大型観光バスとくらべると、座り心地はよくなかったが我慢できた。



火曜日の午前中で高速道路は車が少ない



旅行者は日本人の二人を除いて8人が中国人

一組の若夫婦の他は中年者・老人で、奥さん連中のにぎやかな声が車内に響いていた。八人とも中国最北端は黒竜江省ハルビン出身だった。ハルビン方言は、北京普通話以上に正統で美しい発音だといわれているが、早口の中国語は全然聞き取れなかった。中国語学習歴すでに二年半の私なのに情けなくなってくる。だが、留學歷六年の岩田さんでも早口の女性ガイドの話の聞き取るのは容易でないという。

お昼ごろ本溪市内に入り、「崔姐羊湯飯店」という食堂で昼食を摂った。

米飯・饅頭(包子)の他に8、9品程度のおかずが皿毎に盛られているが、日本のように取箸がない。大盤の回転食台をぐるぐる回して、各自じぶんの箸をつついて皿からおかず

を取るのが中国式である。不慣れな日本人（とくに女性）は不衛生だと思うだろう。が、中国滞在歴 10 有余年の私はとくに慣れてしまった。

日本語教師時代、可愛い女学生が自分の箸でおかずを取って我が皿にいれてくれた。私はそれを笑顔で食べたものだ。そのことを日本の友人に話したら、  
——お前、それが男子学生だったら喜んでいられるか？  
といわれて、返答に困った。まあねえ……

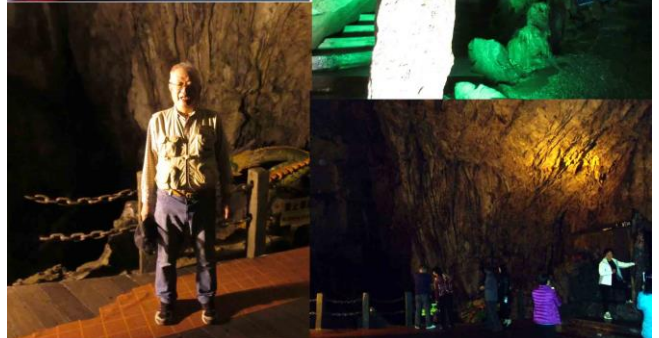


「羊汤」とは羊の肉の入ったスープのはずだがそれはなかった。羊肉は牛肉より上等である

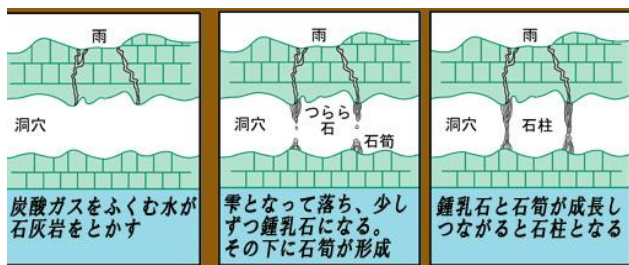
円卓をぐるぐる回して食材を取る

昼食後、いよいよ本溪の鍾乳洞へいった。風景区からゴーカードに乗って、「本溪水洞」入り口に達した。ここは、鍾乳洞であるが、その大部分が池になっているので「水洞」と呼ばれている。

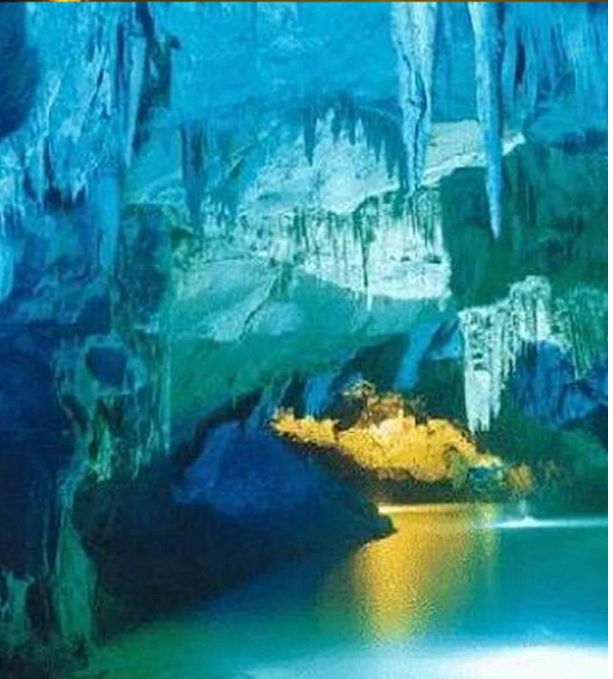
中に入って暫くは、鍾乳石も石筍もない、単なる洞穴の中を歩いている感じで、面白くない。



### 鍾乳石（つらら石）と石筍、石柱の形成の様子



そこを過ぎると元の入り口近くに戻り、電動船に乗って「水洞」の探索が始まった。なお、天井から滴が落ちてくるし、寒いので、厚手の防水服を羽織ることになっている。では、全長 3km の東洋一といわれる「水洞」の写真を紹介しよう。



左上の電動船で出発。鍾乳石が見られるが、石筍は水面下にあり見えない。ときどき頭上近くに鍾乳石が迫り、頭を下げ避けるスリル満点。

前頁の我が写真はリアリズム・タッチだが、岩田さんのはフォーカスが甘いのか、ややボケて見える。いやその方が、幻想的な光景が写しとられていい！ 下をご覧あれ。



かくして、約三十分の水洞探訪はおわった。岩田さんが「すごい！ここを観ただけで、本旅行の価値は十分だった」と感動しておられた。もちろん私も満足した。

## ■中国の鍾乳洞

わたしは、中国で鍾乳洞を見たのは今回を入れて五度ほどある。

江蘇省・宜興市の「善卷洞」と江西省・九江市の鍾乳洞（名前を忘れた）は規模が小さくて印象が弱い。一方、広西チワン自治区・桂林の「冠岩洞窟」と湖南省・張家界（武陵源）の「黄竜洞」は、規模が巨大で鍾乳石と石筍も共によく発達していたので、見ごたえがあった（下の写真参照）。また両鍾乳洞の近くにはカルスト地形特有の奇岩・奇山がある点でも共通している。雲南省・昆明市郊外にある「石林」は鋭い槍のような奇岩の不思議さに魅了されたが、近くにやはり巨大な鍾乳洞があるようだ。



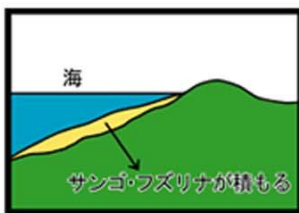
冠岩洞窟（桂林）



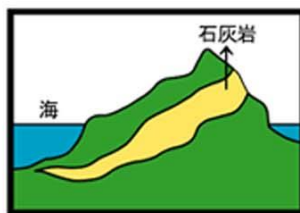
黄竜洞（武陵源／張家界）

鍾乳洞の形成についてインターネットに解説があったので下に紹介する。

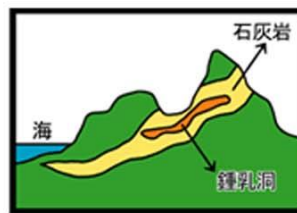
### 鍾乳洞のでき方（飛騨地方の例）



2億5千万年前は海だった。海中のサンゴやフズリナから石灰岩ができた。



地殻変動で陸地となり、日本アルプスが誕生した。



雨で山が削られて谷ができ、鍾乳洞の空間ができてきた。



谷が深くなって、山腹に鍾乳洞の入口ができた。

<http://www.syonyudo.com/make.html>より引用

中国の鍾乳洞は巨大で日本の比ではないが、難点はけばけばしい照明による演出過剰な点である。鍾乳洞とは悠久の時間をかけて造りあげた大自然の美そのものに価値があるのだから、赤い灯青い灯の大都会の雑踏を連想させては、かえって興奮めである。

「本溪水洞」も同様であった。しかし今回の場合、比較的快速的の観覧船に座乗する観光客の目が、めまぐるしく変化する前方を素早く識別できるように、色彩豊かな照明が必要かもしれない。

では、日本の鍾乳洞はどんなのか？ わたしが半世紀以上前の高校時代に修学旅行で秋芳洞を訪ねたときには、照明は白一色だったように記憶している。参考のために、現代の日本の代表的な鍾乳洞の様子をインターネットで検索してみた。



秋芳洞と龍泉洞では地底湖へのライトアップのみであり、龍河洞では一部色彩を施してあったが、全てではなかった。日本の鍾乳洞は自然美を可能な限り生かす配慮がなされているようだ。

こうしてみると、日中の色彩感覚にはかなり違いがあるように思われる。例えば、豊臣秀吉の黄金の茶室と千利休が愛好した素朴な茶室の違いや、日光東照宮の色彩豊かな唐風建築様式と桂離宮の自然の素材を生かした建築様式と、どちらを好むかの違いがあるようだ。中国人（欧米人も）は黄金をあしらった豪華さや物量感を好むのではないだろうか？ 日中の女性の服装を比較しても同様な印象をうけるのだ。

## ■ 千山

前夜、鉄鋼の街「鞍山市」で一泊した我々は次の訪問地「千山」へ向かった。

鞍山市東南に位置する千山は、海拔 708m の主峰を核にして奇岩がおりなす名勝の地で、中国の五大聖地の一つと言われている。200 箇所以上ある名勝古跡を全て訪問するためには少なくとも三日はかかるだろうが、我々旅行団にはほんの三時間しかあたえられていない。そこで最も有名な「千山彌勒大仏」の拝観に多くの時間が割かれた。



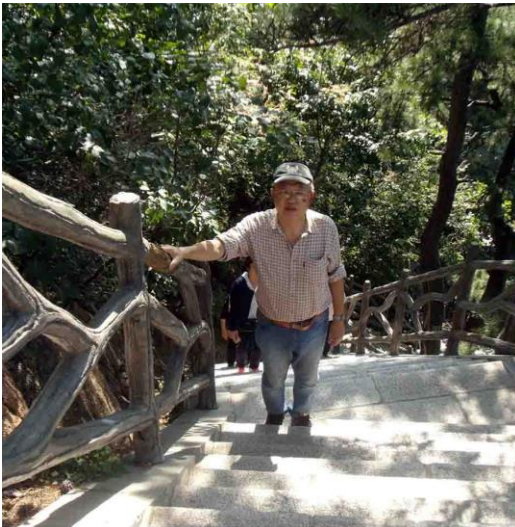
入り口から大仏寺山門までは遊覧自動車で行けたが、そのご徒歩である。山頂に近づくにしたがい険しい坂をのぼらねばならなくて疲れ果てた

ようやくたどりついた山頂から向かいの山肌を眺めた。どこにお目当ての彌勒大仏があるのだろうか？ 南泉庵の仏壇には仏像がなく、広い窓から向かいの山肌が見渡せた。してみると、あの巨大な岩に「彌勒大仏」が掘り込まれているのか？



仏間にはふつう仏像が安置されているものである。ここでは、その代わりに窓があり、仏様を拝むようになっているらしい！ それにしても廟の窓外に仏像があるなんて珍しいことがあるものだ。

帰宅後、インターネットで調べてみると、この「彌勒大仏」は1993年に発見されたという。大仏は左手の五本の指が膝頭の上に置かれ、右手は拳を握り、腕は右足太ももを押さえているようだ。しかし花崗岩は風化しやすく、仏像の表面の大部分が自然の岩肌に戻ってしまったらしい。地質学者は、仏像が彫られてから少なくとも千年以上経過していると鑑定している。



延々と続く急な石段



ちょっと一休みして集合写真を撮る

この後、観覧車に乗り、途中で降りて、もう一つの拝観地である「道教の廟」を訪ねることになった。が、我々は疲れ果てて、登山口で待つことにした。



こうして一泊二日の旅は終わった。旅行団の皆さんから、ハルビンへ遊びにいらっしやいと誘われた。1、2月のハルビンには、札幌の「雪まつり」よりはるかにスケールの大きな「氷祭り」があるそうだ。だが、厳冬のハルビンは零下ウン十℃で、カメラも凍り付いて動かなくなるそうだ。行きたくもあり、恐ろしくもありである。

最後に、大連留学三年目で中国東北部（旧満州）へ旅行したことのある訪問地を下に示して終わろう。

日本語教師時代に旅行で訪問した地は大同市（雲崗石窟）が北限であった。かつては、漢民族によって、万里の長城の外にある中国東北部（旧満州）は言わば、異境の地と見做されていた。だが、日本人にとってはこの地は親しみの持てる土地柄であり、まだまだ訪れてみたい観光地がたくさんある。

(了)

